

「一、つぎの文章を読んで、あとの問いに答えなさい。」

「体を起こすな」

「腰を入れる！」

「頭だけ下がるとるぞ」

フォームを正す先生の大声を意識しているうちに、メンバーたちのタイムはみるみる上がっていった。これまでも同じ練習をしていたはずなのに、不思議な進化だ。やはり、県大会の優勝が励みになったのだろう。

やっぱり勝つことだね。
だが、このまま、うまくブロック大会を迎えられると思った矢先。スタートダッシュ練習を始めて二日目に妙な兆候が現れた。

一日目に続いて、好タイムを出すメンバーたちの中で、東平のタイムがピタッと止まってしまったのだ。背中はずぶぐに上体だけを下げ、腰を入れて必死で地面を蹴る、という基本のフォームをしつかり守っているにもかかわらずだ。

「どこか痛いところでもあるのか」

たずねた先生に東平は首を振った。自分でもわからないのか、もどかしそうな顔だ。

「痛いところはないんですけど、なんか脚が重い」

しきりに首をひねっていた。そうしながらちらっと山下を見た。順調な山下のことが気になっていたのだろう。

「そうか」

先生は腕を組んでしばらく思索すると、

「マナージャー、山下の平均タイムは？」

とたずねた。

「あ、はい」

東平ではなく山下のタイムをきかれて、咲良は慌てて記録表をたどった。そしてポケットから電卓を取り出して計算をした。

「えっと、11秒07です。え？」

2

答えながら一瞬、間違いかと思った。四月からの二か月で、山下はかなりタイムを縮めていた。念のため直も計算しておしてくれたが、やはり同じタイムだった。一般に手動の計時は電子計時よりも速くなると言われるが、実際、タイム自体は縮まっていた。

「そうか」

大熊先生は、なにかを噛みしめるように言った。それ以上は言わなかったが、咲良には噛みしめたものがわかった。先生はきつと迷っているのだ。東平と山下を入れ替えるべきか。

「次からは、バトン渡しをやる」

その日の練習を終えたあと、そう告げた先生の声が、咲良には重さを伴ってきこえた。

山下の勝ちだ。

すぐさま心が答えを出した。だって山下は毎日握りしめているのだ。授業中はラップの芯を。練習中はバトン。そして、自分が出られない試合中もバトンを持って応援していた。

あ、そうか。

咲良はぼんつと手を叩きそうになった。

レギュラーになれなくても、続ける意味がわからないかと思っていたが、今、少しわかった気がした。山下の中に、進化をしている自覚があったのではないだろうか。昨日よりも今日、良くなっている感覚が自分の中にあり、今日よりもっと明日がよくなる期待があった。それが山下の細胞を喜ばせていたのではないか。実際、山下のタイムはぐんぐん上がっていた。人から見て、どんなに結果が出ていなくても、計りは自分の中にある。そして、それを意識せずとも山下は信じていたのだ。

4

なるほどね。
咲良はひとりうなずいた。

果たしてバトン渡しでも、差が出た。五人でやった100メートルリレーで、山下のバトンの受け取り方が誰の目にもいちばんなめらかだった。そしてもちろん、タイムもよかった。

結果を確かめた東平は、悔しげに口をゆがめたが、練習後のミーティングでも、不機嫌を隠さなかった。

「くっそお」

両こぶしを握りしめて、小刻みに震えていた。

「悔しいか、東平」

「はい、悔しいです」

先生の問いに歯を食いしばって答えた東平の目からは涙が出ていた。

「よし、精一杯悔しがれ」

「ぐぐつ、ごうつ」

号泣し始めた東平から目を離すと、先生は部員を見渡した。

「メンバーを入れ替える」

そして、硬い声できつぱりと言った。咲良の胸をぬれた砂がざらりと化したような感触があった。レギュラーの発表は、団体競技にはつきものの試練だ。いつも期待と不安がせめぎ合う。だが、今回ばかりは予想がついているだけに、部員の間には気づまりな空気のみが満ちていた。

部員は先生を静かに見つめていた。直と咲良は部員たちの足元を見ていた。

重たく張り詰めた数秒を破って、先生が口を開いた。

「大黒」

「えっ？」

思わず咲良は声を上げた。まるで予想外の名前だ。顔も一緒に上げる。大黒本人もぼかんとしたような顔をしていた。その顔に向かつて、先生は続けた。

「山下と交代だ」

「……どうしてですか」

大黒は一旦かすれかけた声を、張り上げた。

「交代するしたらダイラでしょ。タイムは俺の方が平均で0・03は上だ。しかも、バトン渡しも落ち着いている」

「平均では、な」

声を上ずらせた大黒に、先生は冷静だった。

「確かに平均値だけを見ると大黒の方がいい。だが、大黒はこのところタイムを落とす一方だ」

先生の言い分は正しかった。少しずつではあるが、大黒はじりじりタイムを下げていた。その点、東平の方は、上下が激

しいものの、良いときは、自己新に迫るタイムも出している。

「だからって、ダイラは不安定でしょ。リレーはチームワークです。安定感が重要なんじゃないですか。不安定要因があると、チームワークが乱れかねない」

「まさにそうだな」

大熊先生はすつと息を吸い込んだ。そしてこう言った。

「しかし大黒、お前も本番には強くない」

「……」

その言葉に大黒はひるんだように、唇を震わせた。試合をまだ二度しか見ていない咲良には、ぴんと来なかったものの、確かに大黒のタイムの平均を引き下げているのは、試合だということはわかっていた。二度の試合のタイムは、いずれも練習よりも遅かった。

黙ってしまった大黒から目を離し、先生は東平に問うた。

「ダイラ、お前は悔しさを味わったな」

「はい」

涙の乾かない顔で東平はうなずいた。

「よし。悔しさはバネになる。そのバネで、県大会も突破しろ」

「はいっ」

「そのかわり、試合まででタイムが上がらなかつたら、替えるからなっ」

鋭い声に、東平は背筋をびしっと伸ばした。

「わかりましたっ」

燃えるような目をし、迷いのない声で返事をした。

その毅然とした表情をちらつと見て、大黒は咲良を見た。お前のせいだというような、鋭い目だった。⁶

(まはら三桃『疾風の女子マネー』による)

* 直 …… 咲良の先輩のマネージャー。

1. 線部1に「もどかしそうな顔だ」とありますが、先生の質問に対して東平がそのような顔になったのはなぜですか。その理由を四十字程度で説明しなさい。

2. 線部2に「答えながら一瞬、間違いかと思った」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 山下はタイムがいい時と悪い時の差が激しい選手なので、平均タイムがかなり縮まっているのは不自然だと思ったから。

イ 今までは圧倒的に東平の方がタイムが良かったはずなのに、いつの間にか山下の方がタイムが上がっていて、計測ミスをしたかと思ったから。

ウ 山下がタイムを縮めているのはわかっていたが、想像以上に平均タイムが縮まっていた、自分の計算間違いかと思ったから。

エ 東平のタイムを聞かれると思っていたのに山下のタイムを聞かれたため、一瞬東平のタイムを間違えて伝えてしまったと思ったから。

3. 線部3「咲良には重さを伴ってきこえた」のはなぜですか。その理由を説明した次の文の空欄にあてはまる言葉をそれぞれ五字で抜き出しなさい。

次の試合に向けて大熊先生が Ⅰ だけでレギュラーを決めることができないので、次にやる Ⅱ の上手さを最終的な決め手にするのだろうと咲良は考えたから。

4. 線部4に「咲良はひとりうなずいた」とありますが、どのようなことに気がついて「うなずいた」のですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア バトン渡しが得意だった山下が、リレーの選手で誰かが不調の時は自分がレギュラーになることを狙っていたということ。

イ レギュラーになれなくても山下がバトンをずっと握っていたのは、自分の中で少しずつタイムが上がることを信じていたからだということ。

ウ 山下が陸上を辞めないのは、結果よりも努力の過程を評価してもらいたいからで、大熊先生がそれを認めてくれたということ。

エ 最初は大熊先生が山下のタイムを聞いた理由が分からなかったが、山下が好調なのを知って東平と入れ替えるつもりだったということ。

5. 線部5「悔しげに口をゆがめた」のはなぜですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア バトン渡しの練習をしていた山下に比べ、自分の練習不足がはつきりし、自分自身が嫌になったから。

イ 山下はタイムもよく、バトン渡しも上手いので、メンバー発表で自分と山下が入れ替わると思ったから。

ウ 自分の方が山下よりもバトン渡しが上手い自信があるのに、誰もそのことを認めてくれないから。

エ タイムに安定感がないため、チームワークを乱す自分はメンバーには選ばれないと思ったから。

6. 線部6に「お前のせいだというような、鋭い目だった」とありますが、この時の「大黒」の様子を「咲良」はどのように感じていますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 今まで信頼しんらいしてくれていた大熊先生に見捨てられたのに、そのきっかけを作った咲良が平然としていることを大黒は腹立たしく思っている。

イ レギュラーを外されることにどうしても納得なつとくがいかないため、大熊先生に助言すけごんをしている咲良のことを大黒は許せないと思っている。

ウ 陸上競技はそんなに簡単に実力を判断できる競技ではないのに、試合をほとんど見ていない咲良の意見が尊重されることに大黒は不満を持っている。

エ 大熊先生の決断はもっともで返す言葉が見つからず、タイムを計っていた咲良に対して大黒は行き場のない思いをぶつけている。

7. 「大熊先生」はなぜ「大黒」をメンバーから外したのですか。その理由を説明したつぎの文章の空欄にあてはまる言葉を指定字数で抜き出しなさい。

大黒はタイムの平均でもバトン渡しでも東平を上回ってはいるが、Ⅰ（八字）という弱点を持っている。そんな大黒よりも、上下が激しいという不安定さはあるが、Ⅱ（三字）を経験した東平の方が試合で好タイムを出せそうだと大熊先生は考えたから。

8. 本文の表現の特徴として最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア できるだけ登場人物の心情の描写びやうしやを少なくし、短い会話文を多くすることで物語全体の緊張感きんちやうかんを作り出している。

イ 過去の出来事であることを示す「た」が文末に多用されることによつて、この物語が大人になった咲良の思い出話になっていることがわかる。

ウ 「やっぱり勝つことだね」や「あつ、そうか」のように、会話文ではないところに咲良の思いが表現されていることから、咲良の視点で描かれていることがわかる。

エ 「……どうですかっ」や「……」を用いることで、揺れ動く大黒の心理を表現し、大黒の存在を読者に印象づけている。

岡本先生は、ことばに限らず、すべての発達は、人間関係を場として行われるとの立場をとっておられますが、なかでもことばの発達には、人間関係がいちばん大きくものをいうのです。ことばの胎生期にいちばん大事なことは、子どもが、親、あるいは自分のいちばん身近にいる人と気持ちを通い合わせることができるようになること。わたし流に言えば、十分かわいがられて、まわりにいる人に自分の気持ちがわかってもらえるという安心感と信頼感をもつようになることです。

ことばを発するまえから、子どもはしぐさや、意味をもたない音声などで、自分の要求や感情を伝えようとします。たとえば、ねむいときに何かに顔をこすりつけるとか、「たかいたかい」をしてもらったのがうれしくて、もっとしてほしいときに「おー、おー」と声をあげるとか。そのとき、まわりのおとながそれを察して、「おねむになったのね」といつて寝かせてやる、「もっとしてほしいのか、よしよし」といつて要求に応えてやる。それがくりかえされると、子どもは、特定の動作や音声を特定の反応をひきおこす手段として使うようになる。これを岡本先生は「意図的道具性」と呼び、その手段を、身のまわりのおとなたちとの間で相互に理解し合って使うことを「協約性」と呼んで、この二つがことばの成立の条件だと述べておられます。つまり、あるしぐさや音声にある意味をもたせて使い、それが相手に通じるという体験がすっかり根付くと、ある時期までは、しぐさやたの音声であったものが、もっと便利な、広がりのある「ことば」というものに置き換えられていく。それが、ことばの獲得の過程なのですね。

日常のなかで自然に行われているこうしたやりとりが、実はことばの土台作りにつながっている、と知ったのは、わたしには大きな発見でした。ボール遊びだつて、馬鹿にしてはいけません。子どもがボールをおとうさんに向かって投げる、あるいは転がす。受け取ったおとうさんが、それを子どもに返してやる。それをくりかえしてたのしむ。なんでもないので、ようですが、こうした遊びをくりかえすことによって、「Aは、Bに、Cを、Dする」という文章の構文がくりあげられていく、というのです。「ぼく（A）は、お父さん（B）に、ボール（C）を、投げる（D）」というわけです。

つまり、赤ちゃんの時期には、身近にいるおとなたちと、十分な関わりをもち、たくさんのかを共有し、たのしみながら体験の量を増やしていくのがいちばんといえそうです。わたしが、早くから赤ちゃんに絵本を与えようという動きにすぐには賛成できないのは、この時期には、養育にあたるおとなと子どものあいだに、絵本といういわば第三者がはいってくるよりも、おとなと子どもが直接向き合つて何かをする、という体験をたつぷりもつことのほうが大事だという気がしてならないからです。ことばの土台である、あたたかい、安定した人間関係が育っていないところに、早期教育を意図して絵本がもちこまれるのは、けつしてよい結果を生むとは思えません。

たとえば、赤ちゃんとおかあさんが互いに相手の目をじつと見つめ、視線がしっかりと結び合う、といったことが、ことば

の基礎工事としてはとても大切だと岡本先生は指摘しておられます。この関係がきちんできていると、おかあさんの目が別のものに注がれたとき、子どもは、おかあさんが見ているものを見ようとし、それに注目する。岡本先生のことばを借りれば、「視線の共有」が、「テーマの共有」につながり、話し手と聞き手とテーマの三角形、すなわち対話の基本構造である三項関係が成立するというわけです。絵本を読んだときには、この関係ができていなければならないのはおわかりでしょう。

親と子の関係がしっかりできていてこそ、両者のあいだに絵本がはいってきても、それがすんなりと受け入れられるのだと思います。ことばの胎生期には、やれ教育だの、絵本だの、と焦らずに、まずは赤ちゃんをたつぷりかわいがって、正面から向き合い、ゆつたりとすごしてくださいと願います。

（松岡享子『子どもと本』による）

1. 線部1に「子どもが最初に……ほしいと思います」とありますが、それはなぜですか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 子どもが本に興味を持つかどうかは、学校よりも家庭環境に影響されるということがいわれているから。

イ 子どもの発達から考えて、なるべく早く本に触れさせることが教育にとって大切なことだから。

ウ いつも本に囲まれて、家族が本を読む姿を見ることが子どもにとって本に興味を持つことにつながるから。

エ 家庭にある本のオーラには、子どもがことばを身につけるうえで特別なものがあるから。

2. 線部2に「黒い点々」とありますが、「黒い点」とは何ですか。漢字二字で答えなさい。

3. 線部3「ニューヨーク公共図書館」はどのようなことを示す例としてあげられていますか。最も適当なものを選び、符号で答えなさい。

ア 子どもたちが本に囲まれた環境にいて本本のオーラを浴びられるということ。

イ 日本の子どももアメリカの子どもも本のオーラを感じる点では同じだということ。

ウ 小さな図書館よりも大きな図書館の方が本の数が多いのでより本のオーラが大きいこと。

エ 子どもたちにあえて難しい本のオーラを浴びてもらう工夫が凝らされていて参考になること。

4. ———線部4に「わたしは、……思っています」とありますが、その理由をくわしく述べている一文を探し、初めの七字を抜き出さない。

5. ———線部5に「子どもがことばを身につける過程」とありますが、どのようなものが「ことば」にかわっていくのですか。十五字で抜き出さない。

6. ———線部6「ことばの胎生期」に重要なことはどんなことだと筆者は考えていますか。五十三字で探し、初めと終わりの五字を抜き出さない。

7. ———線部7「意図的道具性」について、つぎの問いに答えなさい。

(1) 「意図的道具性」とはどういうことですか。「こと」につづくように二十七字で探し、初めと終わりの五字を抜き出さない。

(2) 「意図的道具性」の具体例として適当でないものを選び、符号で答えなさい。

ア、授業中に自分から発言するために手を挙げる。

イ、中にいる人にドアを開けてもらうためにノックを三回する。

ウ、ジュースを買うために店員に代金を渡す。

エ、電車内でうるさい人に黙^{だま}ってもらうために咳^{せき}ばらいをする。

8. ———線部8に「赤ちゃんとおかあさんが……しつかり結び合う」とありますが、このことによって何がつくられるのかを比喩的に説明した部分を探し、「くがつくられる」につづくように十五字で抜き出さない。

9. 本文の内容としてあてはまるものには「○」、そうでないものには「×」をそれぞれつけなさい。

ア 本は静かなところで、集中して一人で読まなければならない。

イ ことばの胎生期には大人がいろいろしゃべりかけてあげるだけでいい。

ウ 親が子どもに本を読む姿を見せることはいいことである。

エ 子どもがことばを身につけるうえで、大人との十分な関わりが大切である。

オ 図書館に子どもを連れて行けば必ず本を読むきっかけとなる。

京華中學校 入学試験 国語解答用紙

[illegible]